
紅涙の意味――Dear my...

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅涙の意味——Dear my..

【Nコード】

N2816C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

魔法学校の卒業試験の課題として、見習い魔法使いは、自分の意思で動くうつくしい少年人形を作った。それが、どんな結末を迎えるか、考えもせずに……。

造形は完璧だった。

明日という日のために一年もかけて作った人形は、愛くるしい顔立ちをしている。ばら色の頬や伸びやかな肢体や銀髪や長いまつげは、本物の人間とくらべてもなんの遜色もない。かえって美しいほどだった。

「目覚めよ、人形。我が魔力によって仮初めの生命をあたえられし存在として、命じるままに動くがいい。我の名はアーヴ・ロンディ―ヌ・ルヴァリオン！」

少年は叫んだ。

床に描いた魔法円の中心に人形が寝かせてある。

雷光が人形をつらぬいた。

部屋にまばゆい輝きが満ちる。白光に目を灼かれそうになり、アーヴは瞼を下ろした。

ゆっくりと目を開ける。魔法円の中心を見ると、寝ている人形の指がかすかに動いた。少年人形は上体を起こし、ぱちぱちと目をしばたかせる。

銀水晶の瞳に銀色のまつげが影を落としていた。

銀水晶は、普段は銀色なのだが、角度によっては透明な中に虹があるかのようなきらめきを見せる宝石だ。それが神秘的な雰囲気一拍車をかけていた。

「はじめまして、主さま」

人形が、絹のようになめらかな声を発した。

アーヴはなにも言わずに抱きつく。陶器でできた人形は、ひんやり冷たかった。

「――やった！ 成功だ！」

額をつきあわせ叫ぶと、人形が微笑む。

「ところで、主さま、わたしの名はなんと言いますか？」

人形の瞳にアーヴが映っている。金髪碧眼で、年齢よりも幼く見える。それが悩みのタネだったりもするのだが、銀水晶に映っているとまるで長所であるかのように思えてくるから不思議だった。

「名前……」

考えていなかった。使い魔として人形を作ろう、としか考えていなかったのだ。それにアーヴの予定では、生きているかのように人間にそっくりなものになるはずではなかった。もう少し機械的に役するのに罪悪感を抱かずにすむようにしようと思っていたのだった。

シルヴァ？ それとも、プラティナ。月のようないさだから、ムーンというのも悪くないかもしれない。

——と、アーヴはかぶりを振った。

違う。この人形には、そう、精霊のことばのような美しい名をあたえたい。そんなものが考えつくはずもないのだけれど、切ないほどの激しさでそう思った。

「……シフィ」

思わずもれたことばに、人形は顔を輝かせる。

「それがわたしの名前ですか？」

「ああ。そうだ、シフィ。おまえの名はシフィがいいよ」

アーヴはまだシフィに抱きついていたいことを思いだし、慌ててはなれた。

「ありがとうございます、主さま」

シフィは表情を変えなかった。

「なにか、やることはありませんか？ なんなりとお命じください」

「この部屋のかたづけを手伝ってくれないか？ それから、アーヴって呼んでくれるか？」

「はい、アーヴさま」

うなずいて、シフィは首をめぐらせた。立ちあがり、人形とは思えないほどのなめらかな動きで、部屋をかたづけはじめる。

シフィを作るのに集中していたため、寮の部屋はとんでもないありさまだった。床も、魔法円を描いているところ以外には、本や羊皮紙が散乱している。ふたつあるベッドと机も書物に占領されていた。

本当はふたり部屋なのだが、ルームメイトに頭をさげて、しばらくほかへ居候してもらっている。明日には戻ってくるので、今晚中にきれいにしておかなければならなかった。

これだから、寮はめんどうだ。どうせならひとり部屋だったらよかったのに。

アーヴは窓をあける。

吹きこんできた風が前髪を揺らした。まだ肌寒い。そろそろ春が訪れるというのに、風は少しもあたたかくなっていなかった。

もうすぐ夜明けがおとずれるだろう。白みはじめた紺碧の空を見ながらアーヴは思った。

明日の卒業試験には、なんとしてでも合格しなければ。

「起きてください、アーヴさま！」

シフィに揺り起こされて、アーヴは大きなあくびをした。

徹夜続きだったので、つい仮眠をとってしまった。どうやら寝すぎてしまったようだった。

「ねむい……」

「おはようございます。今日は大切な日でしたよね。はやく身支度をととのえてしまいませんか」

アーヴは跳ね起きた。

そうだ、今日は卒業試験がある。いつまでも惰眠をむさぼっているわけにはいかない。

アーヴは魔法学院の生徒だった。しかもとびきり優秀な。

普通だったら、すべての課程を修了するまでに十年はかかるとい

うのに、たったの六年で修了してしまったことから、それはうかがえた。

そのぶん周囲からの羨望や嫉妬もはげしくて、アーヴはいつもひとりだった。そもそも彼はみなしごで、才能を見込まれてここにやってきたものだから、余計にだった。

急いで正式のローブを頭からかぶり、そでを通す。シフィの持ってきた水で顔を洗った。

「行こう」

ベッドから降りてアーヴが言うと、人形は礼をしてついてきた。寮の廊下は静まりかえっている。

卒業試験の日は、試験を受けない生徒は休講なので、みんな遅くまで眠っているのだ。

足音をたてないように外に出て、アーヴは思いきりのびをする。

朝の空気が気持ちよかった。

「あれはなんですか？」

シフィが指したのは学院だった。とても古い建物で、壁には蔦がはっついて、老朽化が進んでいる。その分、威厳には事欠かない。

「学院だよ。おれが人生の半分くらいを過ごしたところだ……」

アーヴはここで、八歳の頃から魔法を学んでいたのだ。

親はいなかったが、かわりに師がいた。父のように母のように、ときには姉のように兄のようにアーヴに接してくれた人だ。

「まず先生に会いに行かないと」

「先生ですか？　どんな人です？」

「会えばわかるだろ」

うっとうしいものは嫌いだった。

けれどもアーヴは、シフィにまわりつかれるのだけは悪くないような、そんな気がしていた。自分で作った人形だから、こんなに愛着がわくのだろうか。

教員寮は学生寮にくらべると格段に豪華だ。しかも校舎とつながっているので、冬場はとくにうらやましい。

アーヴの師はなぜか、一番広い部屋をあてがわれている。

だから、扉の前に立つと緊張してしまうのだ。白い廊下とは対照的な、黒い扉は重厚だった。

「いらっしやい、アーヴ」

アーヴが逡巡していると、ドアをあけて女性が顔を出した。

足に届くほど長い黒髪の美女は、両手を広げて待っている。しどけない中にも優雅さがあり、榛色の瞳はどこまでもやさしげだった。

「……もう子供じゃないです」

「そういう顔をするあたり、まだ子供の証拠よ。学院一の美女、リュシアが手を広げて待ってるっていうのに。なにもしないなんて、もったいないと思わない？」

腰に手をあてて舌打ちしながらも、リュシアはふたりを中に追いたてて扉を閉めた。

「先生~~~~、自分で美女って言うのとか、その下着みたいなカッコで人前に出るのとかやめたほうがいいって何度も……」

「これは下着じゃないって言ってるでしょうに」

と、リュシアは、アーヴにしてみれば下着にしか見えない服のすそをひらひらさせた。深くスリットのはいったナイトドレスのような真紅の服は、たしかに彼女には似合っている。ただ、教師にふさわしいものには思えなかった。娼婦が着ているというのなら、うなずいてしまおうけれど。

「それで、そのコが使い魔？」

アーヴは、やわらかすぎて座り心地が最悪になっているソファをすすめられ、座る。シフィは座らずにアーヴのうしろに控えた。

リュシアは向かいにどっかと掛け、挑戦的な視線を叩きつけてくる。彼女がかがんだので、胸元がわずかにのぞいた。

「ええ、シフィです」

また部屋を模様がえしたらしく、前に来たときとはずいぶん変わっている。カーテンはかわいらしいレースのものになり、かけてある絵画は、抽象画になっていた。家具の位置はほとんど同じだというのに、雰囲気がまったく違う。このセンスは悪くないが、服となると悪趣味なのはどうしてだろう。アーヴはいつも不思議に思う。

「いいだね」

「……珍しいですね、誉めるなんて」

「でも、できがよすぎるわ。夕方までしか、もたないんじゃない？」

アーヴはうしろを見た。シフィは気にした様子もなく笑っている。まるで、それ以外の表情をどこかに置き忘れてきてしまったかのよう。

リュシーアは、いったいなにを考えているというのだろう。たしかに、アーヴの魔力では夕方頃までしかシフィを動かしつつづけることはできない。けれど、それを意志を持った人形の前で言うのはどうかと思ってしまう。アーヴはそつとため息をついた。

「――先生」

「ねえ、アーヴ。たしかにあなたはね、優秀な見習いだわ。だけど、幼いの」

「どういうことです？」

リュシーアが嘆息する。

「魔法ってなんだか、わかってる？」

質問の答えではなく、別の問いを投げてきた。足を組んだので、白い腿があらわになる。

「願いですね。常人にはない力をつかって、願いを叶えることです」

腿には目もくれずアーヴは答えた。

「そうよ。だから、魔法の産物には必ず、術者の願いが反映されているってこと。たとえば、魔法で扉をあかなくするってことは、中

に誰もはいってほしくないっていう願いよね」

彼女の榛色の瞳は、吸いこまれそうなほど深い。

「けれどもたまに、不幸な結果を導くしかない願いも存在する。シフィはそれなのよ」

「――よく、わかりません」

「そう。でも教えてあげない」

アーヴは脱力した。前々からのことではあったが、まるで子供のようなことを言う人だ。

「教えて理解できるようなことなら、いくらだって教えるわよ。これは自分でわからなくちゃ意味がないことだからね」

「先生……」

「卒業試験は、惑いの森でおこなわれるわ。持ちものに制限はなし。卒業できたら、あたしの助手になりなさいよ。雑用がほしかったから、ちようどいいわ」

試験は、人によって場所・内容・条件がかわるのだ。不正をふせぐためでもあるし、適正にあった試験をうけさせるためでもあった。が、身のまわりの世話をさせたり、魔法を補助させる使い魔を一匹だけ連れてゆくことは、誰にでも許されていた。

優秀な使い魔がいれば試験は楽になるので、受験する生徒たちは使い魔づくりにいそしむのだ。

「今だって雑用係じゃないですか、おれ」

「お給金でるわよ。学院にかけあってあげる」

アーヴは、うしろに控えていたシフィの首に腕をまわして、ひき倒した。人形は驚いた様子もなく、平然とされるがままになっている。

やったあ、とでも叫びだしたい気分だった。

惑いの森のどこかに群生している、焰華という花を採ってくるこ

と。それがアーヴに課された試験の内容だった。

刻限は、夕陽がしずむまで。

ただし森は不思議の宝庫。毎年、数人は行方不明者が出ている。
難関中の難関だった。

「疲れた……」

アーヴはへたり込んだ。

もう昼すぎだ。朝からずっと歩きどおしで、いいかげん、いやになっ

てきでいた。
「そろそろお昼にしましょうか？」

神秘的な雰囲気をもった人形が提案する。シフィは荷物をひとりで背負っているというのに、涼しい顔をしていた。やはり、も

とが人形だけに、疲労ということばを知らないらしい。
「そうだな……」

ちょうど、木々が比較的少ない場所だ。冬の終わりだというのに青々とした葉をしげらせた木のあいだに、三人ほどなら座ることのでき

そうな隙間がある。
惑いの森には獣道さえもなく、ひどいところになると木が密生して

いて通れなかった。だから、これだけのちっぽけな隙間でも、アーヴには貴重なものに思えた。
「――にしても、焰華ってどんなのなんだろうな？ 燃えるような花……。だめだな、おれの知識を総動員したって想像できそうにな

い」
アーヴは座り、シフィから干し肉を受けとった。

「……きつと、うつくしい紅色ですよ」

シフィもアーヴの隣に来た。

動力源がアーヴの魔力なので、シフィはなにも食べない。けれど、こ

くれているのだろうとアーヴは思った。

「想像力もあるんだな」

「そういうふうには作られているようですから」

シフィに微笑まれ、アーヴはよく噛んでもいない干し肉をのみくだしてしまった。のどが詰まって苦しくなる。

もがいていると、シフィが水筒を差しだしてくれた。

「だめですよ、ゆっくり噛まない」と

「――わかってる」

人形は困ったような顔をした。まだ作ってから、それほど時間はたっていないというのに、シフィには表情があらわれはじめていた。銀水晶の瞳がすべてを雄弁に語っている。

「なあ、いっしょに焰華、見よう」

「はい」

またも、シフィは嬉しそうな色を浮かべる。

と、木陰から白金色の獣が、のっそり姿をあらわした。尻尾はけだるそうに揺れて、耳はどんな小さな音でも逃すまいとしているかのようにぴんと立ちあがっていた。

狼だ。アーヴも図鑑でしか見たことはないものの、その姿は知っていた。

けれど、絵よりも実物のほうがすばらしい。実用のためだけの、むだが存在しない筋肉でおおわれた身体は、優美な線を描いていた。

そして瞳。絵ではくすんだ青だったが、実物は銀色がかった蒼だ。

アーヴは狼としばし見つめあった。

「銀色狼……か？ でも、それにしてもキレイだ――」

「狼、ですか……」

シフィが恍惚としたつぶやきをもらす。

狼が先に視線をそらし、アーヴの足下で丸くなった。

アーヴは手を伸ばして毛皮にふれる。狼は身じろぎひとつしない。

首から背中にかけてなでてやると、白銀の獣は目を細める。白金色の毛皮はビロードのような手触りだった。

「試験中じゃなかったら、昼寝したいくらいだ」

大きなあくびを、ひとつ。

「でもそろそろ行きませんか」

「そうだな……仕方ない」

その刹那、狼が立ちあがって天にむかって咆哮した。アーヴの頬をなにかがかすめていく。

肩ごしに振りかえる。背後の木には矢がささっていた。

頬に熱さを感じる。手をやると、ぬめる液体にふれた。

――血。

さいわい、毒は塗られていないようだ。狩猟用の矢に塗られるのは、即効性の毒であることが多い。

アーヴは胸をなでおろした。

しかし、それもつかの間のこと。すぐに緊張感を取りもどし、五感を研ぎ澄まさせる。

「誰だ!？」

左の木陰か、それとも右か。もしかしたら木の上か。アーヴは視線をはしらせた。

「アーヴさま」

シフィが樹上をみながらささやく。

広葉樹の葉陰に影が見えた。小弓をかまえた姿は、どう見ても猟師のそれだった。

けれど、この森では狩猟は禁じられている。学院の所有物ということもあったし、聖獣や珍獣、ほかでは見られない植物・鉱物が数多いということも理由としてあげられる。

すなわち、密猟者。

アーヴは狼をかばって立った。あいつの狙いは、この狼に違いなし。都で貴婦人の襟をかざったり、敷物にされたりするために、こんなにも気高い生きものを殺させてはならないと思った。

足を踏みならすと、アーヴの意図をくみとったかのように狼は走り去る。

枝をつたって逃げようとする影にアーヴは叫んだ。

「応えよ風声、舞い散れ風塵！ 我の名はアーヴ・ロンディーン・ルヴァリオン！！」

彼の呼び声に応じて旋風がおこり、樹上の影を地に落とした。

やわらかい土が緩衝となって、影――男は死をまぬかれる。落ちたときに体の下敷きとなって弓は折れてしまったが、男自身にはさしたる外傷はなさそうだ。

背が高くどっしりとした男は、アーヴを視線で射抜く。

「去るなら見逃す。あくまで去らないと言うなら……」

アーヴが言い終える前に、男はばねのように跳ねた。背負った矢筒から矢を抜いて、短剣のようにかまえ持ちながら突進してくる。

避けようとアーヴが動くより先にシフィが反応した。

男の腕をつかんで止める。力が必要なことだというのに、舞のような優雅さで。

男がそれと同時に繰りだした膝が、シフィの腹にめり込む。

硬質の音がした。陶器の身体が碎ける音だ。

シフィはくずおれる。

まっぷたつにこそならなかったものの、人間でいえば腹が裂けたようなものなのだ。立っていられるはずがない。

男の目が大きく見開かれた。

「シフィ！」

慌てて抱きおこし、シフィの腹に手をやった。

拳ふたつほどの大きさの穴があいている。中に存在する空洞が痛々しい。

男が呆然としているアーヴを突きとばした。

幹に背中をしたたか打って、アーヴは痛みへのけぞった。

「こっちの方が、毛皮なんかよか高く売れるぜ。いただいてくよ！」

アーヴが動けないでいるあいだに、男はシフィをかかえて逃げていった。

シフィは抵抗もせずに抱えられている。壊れかけて満足に動けないということもあるだろうが、このまま男が逃げてしまえば、アーヴは助かるとでも考えているのだろう。

人形はあくまで創造主に忠実だ。

「――シフィっ……！！」

これしきのことで動けなくなってしまう自分を、アーヴは情けなく思った。けれど、彼の長所は器用さと賢しさ。このふたつを使って、大切なシフィを取りもどせばいいのだ。

アーヴの中には、かすかだが、シフィを恋う気持ちがうまれていた。恋と呼べないほどの淡い淡い感情ではあったけれど。

夕陽が落ちるそのときまでに、焰華を見つけだし、シフィを奪取しなければならぬ。

アーヴは地べたにあぐらをかいて、目をとじる。

瞼の裏には《世界》がある。大地と森と風と一体になって、意識を駆けめぐらすために、千々に乱れる精神を縫っていく。

――世界は彼であり、彼は世界だ。

身体という境界を忘れ去る。世界に身も心もとけこませる。

アーヴは風だ。急に強く吹いて木の葉を散らしてしまったり、枝から落ちかけた慌てももの仔リスを受けとめてやったりする。

そして彼は大地だ。身体の上を駆けていく獣のひづめを感じ、穴をほる蟻のあごにこそばゆさを感じる。

そこに混じる異質さ。自然のものではない、つくられたものの感覚。革靴の感触だった。

それから近くに熱がある。人肌の生温さとは違う、たぎるような、あたたかさ。

——焰華だ。

アーヴはほくそ笑んだ。これだけ接近して存在しているのなら、両方を手にするのはたやすい。太陽の昇る方角に目指すものはある。

「急がないと……」

太陽はもう、正午を大幅にすぎた位置にあった。アーヴは集中を
といて、はなたれた矢のように走りだした。

場所をつかんでいるとはいっても、子供の足と大人の足とでは、やはり後者のほうがはかった。

夕方になって、アーヴはやっと、ぐったりしたシフィをかかえた男の背中を見つけた。

「蔦よ、木の根よ、あの男の足をからめとってしまえ！ 森を荒らすもの、密猟者を逃がすな！ 我の名はアーヴ・ロンディーヌ。ルヴァリオン！！」

なるべく遠くまで響くよう、アーヴは声高に唱えた。

葉ずれの音が聞こえてくる。地面が脈動した。

触手のようにうごめく蔦が、男の腕や足にからみついた。男が抵抗しても、蔦ははなれない。千切ってもすぐにもどってしまう。

木の根は男の腕からシフィを奪いかえた。アーヴの腕の中にそっと置く。

「大丈夫か？」

「はい……」

人形はまつげを伏せたまま、うなずいた。

「返せ！ それくらいは持ちかえらねえと……」

「身の程をわきまえたほうがいいな。おまえは囚人なんだよ」

訴えかける男の髭面を見ながら、アーヴはこの男にも帰る家があり、帰りを待ちわびる家族がいるのだらうと思った。

フツウなら、誰にでもそういうものがある。けれどアーヴはフツウでないから、それを持たないのだ。

それを少しだけ寂しく思う。アーヴも若い少年だった。世間から隔離された場所で生きてきたことが、それに拍車をかけていた。

「今回だけは見逃してやろう。二度とこの森に足を踏み入れるな。禁を犯したとき、おまえの体は腐れおちるだろう」

シフィを抱いたまま、アーヴは手をかざす。

もしも男が禁を破るようなことがあれば、迅速に、そして確実に、呪いは果たされることだろう。

蔦がただの植物にもどっていく。男の身体に自由が取りもどされる。

「冗談じゃねえ！」

「まっとうに稼げば生きられないこともない」

アーヴは踵をかえす。うしろから男が、罵声をあびせてくる。

見あげた空は燃えている。刻限まで、あとわずか。

「平気です、歩けますから」

シフィがどこも大丈夫そうに見えない様子で言った。

「どこがだ。大人しくしてろ」

アーヴは人形を、横抱きにしている。陶器でできた人形は重く、アーヴの腕は悲鳴をあげていた。

「……ですが」

シフィが言いつのる。アーヴはシフィの瞳にかかる前髪を、腕を揺らすことではらいのけてやった。

「約束しただろ、いっしょに焰華を見ようって」

いつまでも変わらずに続く木々を見ながら、飽きもせずアーヴは一步一步大地を踏みしめていた。この先に焰華があるのだ。なんとしてでも、シフィといっしょに焰華を見たい。もうすぐ、人形の

心は消えてしまうのだから。

「あ——…」

ふいに視界がひらける。

木々に囲まれた、小空間があった。硝子細工の宝物を守るようにひっそりとしている。神聖な雰囲気さえただよっていた。

そして。

花があった。

普通なら花卉があるべき場所にある、天からもたらされたかのような炎に、アーヴは目を奪われた。はじけ、ゆらめきながら咲き誇っている。こんなもの、見たことがない。

花心は、地底でくすぶる、冷たさと熱さとをあわせもった炎の青だった。

だが、茎や葉は普通の植物のものと大差ない。ひよろりと長いまつすぐな茎に、縦横に葉脈のはしった、アーヴのてのひらほどもある広幅の葉が互い違いについていた。

「あれが焰華……」

シフィが夢見るように言った。

天を燃やしているのが太陽なら、地上で燃えているのは焰華だった。もともと同じだったものが分化し、独自の進化をとげたかのように同種でありながらも別種な輝きだった。

アーヴは壊れた人形を木にもたれさせる

群生して、まばゆい光をはなつ焰華に歩みより、ひととき美しい一本を折りとる。

「ほら、これ」

アーヴが捧げた花を受けとったシフィは、それを胸に押しいだいた。燃える花卉は熱をつたえはするものの、よそへ移りはしない。でなければ、森はたちまち灰になってしまうことだろう。

「キレイですね。なんだか、今、はじめて消えたくないって思いました」

「そんなこと！」

「いいえ、わかってます。もう、魔力が抜けかけています……時間がきたようです」

シフィは寂しげな視線をからませてきた。

アーヴは答えず、シフィの両頬にふれる。

わかっている。もう時間なのだ。シフィはただの人形に戻ってしまおう――。

額をこつん、とあわせた。瞼をおろして、つめたいはずの陶器の唇に自分のそれを重ねる。

シフィの唇は温かった。吐息もまるで花の香のようで。

「アーヴさま……ひとつだけ、頼みがあるんです」

儀式のような軽いくちづけのあと、吐息と同じくらい甘い声でシフィがささやく。

「なんだよ？」

アーヴの頬はぬれていた。口元に液体がふれる。瞳から流れる水分は、無理やりしぼっているように塩辛かった。

「忘れないでくださいね。わたしの人格は消えてしまいますけれど、身体に記憶は残りますから、きっと」

銀水晶の瞳に涙がにじんだ。人形に流せるはずのないものだった。

「忘れるもんか」

「よかった。これで、安心して……ねむ……れ、ま、す……」

――カ　　タン。

シフィ、いや、人形の腕が落ちた。魔力の抜けた彼は、ただの陶器人形でしかない。

シフィはもういないのだ。

彼は消えてしまった。もう同じものを作りだすことはできないだろう。

よしんば作りだせたとしても、それはシフィであってシフィでない。別物だ。

「あ……あ……あ――！」

アーヴは人形を抱いて、泣きくずれた。
もう少しだけ。

もう少しだけ、いっしょにいたかった。彼のことを知りたかった。

この感情を人は愛と呼ぶのかもしれない。

けれど、どうでもいいことだ。

夕陽が沈みかけている。間にあわなくなる寸前まで、こうしていたかった。

リュシアの助手となったアーヴの私室には、今も少年人形が飾ってある。

人形は埃もかぶらずに、大切に大切に保存されていた。

首にかけられたロケットには、人形とアーヴが幸せそうに笑う姿が描かれた絵がいてある。それと同じものを、アーヴは肌身はなさず持っていた。

あの日、ながした紅涙の意味をいつまでも忘れないために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2816c/>

紅涙の意味――Dear my...

2010年10月8日15時34分発行